

満州

満州引揚げの苦難と人の恩情

北海道 江口 榮

一 はじめに

山あり谷ありの八十余年の私の人生で、幼い頃、東京で被災した関東大震災のときの恐怖と、戦争に負けたが故に、いや応なしに体験させられた避難引揚げという地獄を見たような恐ろしさは、今でも心の底に残っています。残酷無惨な避難道中の恐怖や我が子を失った悲しさ、悔しさは、生涯忘れることはありません。しかし、それと共に、戦争に負けた私たち難民に、温かい支援の手を差し伸べてくださった在留邦人

や中国の人達の恩情に、心からの感謝の気持ちも忘れたことはありません。

戦争という愚かな行為が人間を変えます。同じ日本人なのに、仲間を裏切り踏み台にして、自分は安穩に生きようとする人を数多く見受けた中に、気の毒な日本難民に同情してくださった中国の人、国籍は異なっても情けに厚い人のいたことを、引揚げ労苦体験を綴るにあたり、語り継ぎ、私の感謝の意といたします。

二 渡満の動機とその後の状況

私は、大正四（一九一五）年十二月八日、山形県米沢市近郊で、女四人の末っ子として生まれました。そのころ、父は山に入り木挽ぎ（こびぎ）の仕事をしていましたが、間もなく上京。私も父母と共に暮らすようになりました。父は「ダット自動車」という会社に就職。母

は、会社の寮のような所で炊事の仕事をしていたようでした。自動車関係の工場のようにでしたが、社長は橋本益次郎さんといい、「日本で初めて自動車を作った人だよ」と聞かされた事を覚えています。

東京での暮らしの思い出は、椎名町小学校に入学したころに、アメリカから人形使節団が来日し、日本で初めてという青い目の人形を見せてもらったことでした。また、飛行船という物を初めて見て、あんな大きな物が空に浮いていると驚きました。「ツェッペリン号」と呼んでいたようです。小学校三年生のとき関東大震災が起き、幼かった私には、あの震災と火事の光景は、ただ恐ろしくて恐ろしくて震える思いでした。震災のあと、自動車のガレージの中で寝起きしていましたが、しばらくして、父母は東京の仕事をやめ、山形県上山へ帰り、私は上山小学校に転校しました。そこで、アメリカの人形使節団の人形を「日本で初めてですよ」と先生の説明で見ました。

上山で学校を卒業して再び上京しました。幼いころ父が働いていた橋本社長の所で働きましたが、昭和初

期に不況の時代となり失業して、やむなく、また山形に戻り、姉の所で養蚕の仕事を手伝いました。そんなときに主人との結婚の話が持ち込まれました。数えて二十歳のときでした。

主人の実家は大きな農家で、当主の江口富藏（主人の兄）は農業会長や森林会長等の要職を務めておりました。東京から帰った父は、上山で下駄屋を開業し、下駄の材料にする桐の原木を江口家から仕入れており、そのために度々出入りしておりました。そんな経緯で江口家当主から「満州第一次武装移民として弥栄村に行っている弟の嫁を探しているが、そちらの娘を嫁に欲しい。是非ともお国のため、満州へ嫁にやってくれないか？」と、父に頼みこんだのです。その当時は、「お国のため」と言われたら断り切れない時代だったとのこと。父も承諾し、私も納得のうえに、満州弥栄村へ嫁ぐ話がかとまりました。

昭和九（一九三四）年秋（十月ごろだったと思う）、いよいよ、まだ見ぬ主人の待つ満州へ行くことが決まりました。しかし、私と栗野さん、横戸さんのほか何

人かの大陸の花嫁を引率して渡満する、同じ村の江口さんの花嫁がなかなか決まらず、神戸から乗船する予定の船が出港してしまいました。そのため予定を変えて、新潟から乗船。江口さんの嫁さんも同行して、日本海を三日がかりで渡り、やっと朝鮮の清津港に上陸しました。ここで一泊し、汽車で北上、ハルビンに到着しました。

ハルビンで松花江を下る船便を待ち、何日か泊まることになりました。そのときハルビンに住んでいる私の従兄が訪ねてくれました。「お前がこれから行く佳木斯ジャムスの事はよく知っているが、決して良い所でないから、行くのはやめてここに残った方がよい」と引き止められました。同行の栗野さんが、本当に残るのかと心配してくれましたが、主人のところに嫁ぐ決心をしてここまでできて、今更気持が変わることはない、と、きっぱりと断りました。

松花江を二日かけて船で下り、船中「南京虫」に悩まされながら佳木斯に着き、弥栄開拓団佳木斯出張所に泊まりました。永豊鎮から、栗野さん、草刈さん、

そして主人になる江口富七の三人が馬車で迎えに来ており、初めて主人と顔を合わせました。佳木斯から弥栄村に向かう途中には、匪賊が出没する場所があり、最近も襲撃を受け犠牲者が出たなどと脅かされ、恐る恐る弥栄村に向かったのです。

孟家崗モンジャカウ（弥栄村）に着き、早速北大営小隊に向かいました。小隊では、まだ住宅建設中でしたが、とりあえず完成した住宅に新婚の人たちは住まわせていただきました。その後、小隊を北大営屯と羽陽屯に二分しました。私たちは羽陽屯のうちの大房子と称する場所に移りました。この場所は、鉄道が開通（昭和十一年）してから弥栄駅より八虎力駅に近くなりました。

昭和十年、長男が生まれ、十三年には次男も生まれました。満人（原住民をこのように呼んだ）を一家族雇って、農業経営を応援してもらいました。大豆・高ソヤ梁リヤン・とうもろこしなどが主要作物でした。乳牛も飼いい、搾乳した牛乳は八虎力駅近くにあった牛乳集荷所に出荷しました。他に水田も耕作して自家用に充てたり、残りは弥栄開拓協同組合に出荷しました。地区の

そばに弥栄組合の水田班があり、主に朝鮮人が耕作に従事していました。水路や堰などは整備され、水田耕作には有効に利用できました。この水路には、ナマズや鮒などがたくさんいて、夏には、わずかの間にバケツにいっぱい獲ることができたものです。特殊な作物として、タバコを栽培しました。陰干しされたタバコの葉が飴色になり、軒高の倉庫の中につるさされているのを、他の農家の人が視察にきたりしました。また、農産物品評会が開かれると、主人は毎回出品し入賞しました。主人は根っからの百姓で、黙々とよく働く人でした。

満州の土地は大変豊かで、肥料をやらなくても作物は何でもよく育ちました。私たちは雇っている満人と共に働き、昭和十八年ごろから始まった農産物の供出では、必ず完全に割当量の責任を果たしておりました。雇人の満人もよく働く人で、私どもと仲良く交際し、子供の面倒などもよく見てくれました。総体的には、日本人の家に隣接して住む満人は、親近感もあり友好的でしたが、日本人部落と満人部落に離れて居住

する場合は、概して友好関係は薄かったように思いました。

子供は男三人、女一人授かり、元気に育ちました。上の二人は、隣の山形屯にできた弥栄国民学校山形分校に通うようになりました。すこぶる平和な暮らしを過ごしておりましたが、アメリカ、イギリス、中国等を相手にした戦争は益々激しくなり、生活物資の不足などで、だんだんと窮屈になりました。内地では、食糧が配給制度の強化で大変だと聞きましたが、弥栄ではまだそれほど緊迫しておらず豊かでした。

三 終戦直前から避難引揚げ

昭和二十年に入ると、弥栄村でも男の人たちが次々と召集され、戦地に向かうようになりました。春の種まきが終わり、初夏の除草作業も終わった七月に、とうとう主人にも召集令状が届きました。このときは、同じ部落の働き手の旦那さん方がほとんど召集されました。後になり知りましたが、七月から八月にかけて弥栄村の男子は根こそぎ召集され、残ったのは年寄りと女・子供だけになったのです。戦争に負けるとは考

えていませんでしたから、これから先どうするか、戦争が終わって主人はいつになったら帰って来るのだろうかと思う日々でした。主人は、満州と朝鮮の国境にある安東の部隊に入隊だと言って出征しました。

このころになって、満人たちが集まっているのを見ると、私たちに聞こえないような話し振りが妙に気になり、何となく不安になりました。主人が召集される前に、同部落の満人にお金を貸してあり、入隊するときに「お金が必要になったら、返済してもらおうよ話をつけてあるから」と申して行きました。八月になって返済を求めたところ、満人の対応が何となく不自然でした。今までなら、金を借りている負い目から「申し訳ありません」という気持ちで伝わるのですが、このときの態度は今までと違ったものでした。主人がないから、女を甘く見ているのかも思いました。まさか日本が負けるなんて思ってもいない私たちには、満人の間で「日本はもう負けるところまできている」とうわさしていることを知らなかったのです。

八月九日か十日に、将校さんのような人が来て「こ

の辺りは間もなく戦場になるかもしれないから三、四日のうちに立ち退き命令が出るだろう。準備した方がいい」と話をして帰りました。部落内はどの家も旦那さんは全部召集され女手だけですから、早速集まり相談しました。しばらく避難するとして、当座の食物をどうするかなど話し合いの結果、餅をついて持参することに決まりました。私は早速その夜のうちにもち米を水につけました。この時点では、しばらくして戦争が治まればまた帰って来る考えで、わずかの間の一時的避難だと思いこんでおりました。

ところが十一日の午前中だったと思いますが、八虎力警察署の満系の警官が来て「今日夕方までに当分の間の食糧、着替え、身の回り品を持って八虎力駅に集合するように。戦火を避けて南方へ一時的に避難する」という文書を見せられました。私の家が部落の入り口なので連絡に来たのです。とにかく急いでみんなに知らせなければと、各家々を回り知らせました。

私たちより十歳も年長だった高橋とめのさんをいつも頼りにしていたので、皆が高橋さん宅に集まり相談

しました。「馬車は家ですすからみんなで乗って駅に行くことにしよう」と高橋さんが申され、家に戻って出発の準備をしました。二日目にそれとなく身辺の整理は始めていたものの、ほとんど手付かずの状態でしたが、前日ついた餅と米、塩を少々、着替え、家に保管していた銃と弾薬を持ち、高橋さん宅に集まりました。子供たちにも持てるだけの物を背負わせ、私は荷物の上に乳飲み子を背負いました。雇人の満人が涙を流しながら「後のことは心配しないで、必ず帰って来てください。待っていますから!」と言って外から家の窓に板を打ち付け、しばしの別れを惜しみ見送ってくれました。高橋さん宅から馬車で八虎力駅に行きましたが、男手は高橋さんの十三歳になる息子さん他にもう一人男の人がいただけでした。

駅に着き汽車の来るのを待っていると、近くの朝鮮人が大勢押しかけて、私たちも一緒に連れて行ってくれと涙ながらに訴えるのです。私たちではどうにもなりませんので、上に立つ引率の人に申し入れておりましたが断られて断念したようでした。夕方になり私の

家の雇人の満人が銃に着ける短剣を届けにきました。「日本人が剣を忘れてはいけないし、私がこんな物を持っていたら怒られるから」と言いながら帰りました。八虎力駅は、羽陽屯、山形屯、向陽山訓練所の人たちがいっぱいでしたが、西弥栄開拓団の人たちは来ておりませんでした。

夕方遅く、佳木斯方向からきた汽車に乗りましたが、屋根のない貨車でした。間もなく千振駅に着きましたが、どうしたことかここで降ろされてしまいました。汽車の機関士は日本人で、私たちの引率者との話し合いの中で「二日前、牡丹江に向け佳木斯を出発した日本人たちが、千振から先へ汽車が行けずここで降ろされて、食べる物もなく野宿しているので、まずこの人たちが牡丹江まで送り届け、そのあと必ず迎えに来ることを約束する。同じ日本人が困っているのだから人道的に一步譲ってください」という説明で了解したそうです。必ず迎えに来る約束が本当に守られるものか否かは、上に立つ引率者の判断で、私たちは千振駅のホームで野宿することになりました。暗やみの中

で、西弥栄や千振の部落の灯が点々と見えるので、あの人たちはどうして避難しないのだろうか、連絡が届かず知らないでいるのではないだろうかなどと心配をしましたが、そうかといってどうすることもできませんでした。

一夜明け、汽車が来るのを待ちましたがなかなか来ませんでした。やはり約束はあてにならないかと悔やんでいましたが、夕方近くやっと汽車が到着しました。約束通り迎えにきてくれたとホッとしました。汽車は千振から先に行けず折り返し佳木斯へ向かうことになり、部落別に分かれて乗りましたが、やはり屋根のない貨車でした。間もなく八虎力駅を通りましたが今日はだれも乗らず、西弥栄の人たちにはまだ連絡がついていないのだと思いました。八虎力を出て、汽車から眺める羽陽屯の部落は、家畜が群れ遊んでおり、いつもどおりの平靜な風景でした。

弥栄駅に着くと、ここでは大勢の人が待つておりました。前夜おそく避難命令があり朝六時に集合したとのこと。夕方まで待つて待つて待ちくたびれたと話を

しておりました。弥栄組も男の人は数少なく女と子供ばかりでした。弥栄駅を出発したのは十二日夕方六時ごろだったと思います。汽車は走ったり止まったりでなかなか進まず、佳木斯に着いたのは朝明るくなりかけたころでした。佳木斯駅のホームで炊事をしたりして出発を待ちましたが、突然「敵の飛行機が来たから隠れる！」という声で、慌てて貨車の下に潜り込みました。佳木斯市街はあちこちで火の手が上がり、黒煙が空一面でした。

貨車の中は、人と荷物で身動きも思うようにならず、幼い子供は驚きと不安で泣き叫ぶありさまです。辛い私の子供は上三人は男の子で、あまり足手まといにならず助かりましたが、昭和十九年生まれの子はまだ乳飲み子で、あまりにも変化した周囲の騒ぎにおびえて、泣きながら必死にしがみついております。だれもがこんな目に遭うのは初めてなのです。戸惑うのはあたりまえです。前の晩、野宿でほとんど寝ていないのと、これから先は一体どうなるのかという不安と疲労と緊張で、頭のしんがキーンとな

り、頭がおかしくなるのではと思ったことを今でも覚えております。

佳木斯駅のホームでは、汽車がいつ発車するのか分からず離れることもできませんでした。夕方になり雨が降り出し、無蓋車の屋根を作らなければ大変だと思っても、作る材料も、また、作る人もいません。急場しのぎに毛布等を張りましたが、そんなことで雨を防ぐことにはなりません。夕方になりようやく発車しましたが、この雨よけは何の役にも立ちませんでしんまで冷え込んでしまいました。汽車は止まったり動いたりして、十四日夜明けに南又に着きました。ここで雨が小止みになったので、子供たちのぬれた衣服を着替えさせました。家を出るとき、子供たちの着る物を十分にと考えて、良い着物は持たず着替えだけ大量に持参したので、おかげで風邪をひかず助かりました。よその子供の中には、ぬれたまま過ごして風邪にかかり、それがもつて命を落としたことを知り、いざというときの着替え衣類の必要なことを身に染みて感

じました。

そのうちに「朝鮮人のスパイが汽車に乗りこんだから気をつけろ」と伝令があり、貨車の出入り口を監視することになりましたが、男のいない私たちの車両では、足手まといの子供がいない横戸さんの奥さんが、銃を持って入り口の警戒を受け持ってくれました。

「朝鮮人のスパイ」と聞いて、幼いころに遭った関東大震災のときに、同じように、警戒しなさいと言われたことを思い出し、背筋の寒くなる恐ろしさを覚ええました。

家を出て五日ほどたち、当座の食糧として持参した米は、雨でぬれてすっかり蒸れてしまいましたがお餅は何とか食べることができました。我が子に食べさせようとする、周りの子供が欲しがるので与える、と、見ている人が「そんなに分けてやったら自分の食べるのが無くなるでしょう」と言いましたが、飢えてひもじい子供たちを見殺しにできるものではありません。こんな不衛生、不規則な生活では健康に良いわけはなく、病人が続出するのはあたりまえのことだった

のです。

八月十六日、綏化^{スエカ}駅に汽車は着きました。軍の飛行場の格納庫に收容されることになり、駅から遠い收容所まで、着のみ着のままの避難民が列をなして歩き続けました。今まで体験したことのない、日本人としての惨めな姿でありました。そしてこの綏化で、日本が戦争に負けたことを知らされました。日本は負けないと固く信じてきた私は、敵国の宣伝ではないのかと疑い、負けたとはどうしても思えませんでした。

綏化の收容所にソ連兵が来てからは、その振る舞い・行動に恐ろしさを感じました。戦争に勝った気持ちからでしょうか、少しでも言うことを聞かないとすぐ暴力です。こんなことがあります。ソ連兵が巡回してきたのを見て、羽陽屯の五十嵐増吉さんが外で遊んでいる子供たちに「ソ連兵が来たから早く中に入れ」と叫んで室内に入れようとしたところ、何が気に障ったのか、銃の台尻で殴られ、歯が欠け出血しました。ソ連兵の横暴さに、戦争に負けた惨めさを知らされました。

綏化に着いて間もなく、弥栄村で召集された人たちが戻ってきました。終戦直前の最後の召集者が主で、入隊する所もなく散り散りになって、家族を捜しあてて綏化にきたという話でした。羽陽屯でも何人かの人が戻ってきました。綏化を出るまで主人の帰りを待ちましたが遂に戻ってきませんでした。

綏化に着いたときには、ほとんどの人は持ってきた食糧は無くなっていたと思います。北滿から集まって来た日本人避難民はものすごい人数でしたが、どこでお世話してくれたのか、ドラム缶で煮たトウモロコシや高粱の丸粒のものが配られたりしました。満人が店を出していたので、お金さえあれば食糧を買うこともできましたが、お金の無い人は惨めで、子供は飢えて衰弱し、栄養不良から風邪・肺炎・赤痢・ジフテリアなどの病魔にとりつかれて亡くなっていききました。夜になると收容所の部屋のあちこちでローソクの灯がともります。毎日毎夜のことでした。弥栄村の幼な子はここで数多く命を落としました。本当に気の毒なことでした。幸いにも私の子供たちはみんな元気で命を永

られました。

収容所は一室に何百人も寝起きできる所でした。コンクリートの床に麻袋やムシロを敷いて寝床にしたものの、夜になれば冷え込み、大人でさえも身にこたえる環境でしたので、体力の弱った子供たちが病に倒れるのは当然のことだったのです。この格納庫に収用されたとき、幼いころに遭った関東大震災で体験したガレージでの生活を思い出し、赤い炎と黒煙の大地震、大火の情景が頭に浮かび恐ろしさに震えました。

九月に入り朝晩の寒さが身にこたえるようになり、暖かい場所へ移れないのかと思っていましたところ、上に立つ方々のお骨折りで南満へ移動することになりました。乗車順番の班編成をして、一班から十班までが第一陣として出発することに決まり、私たちは第十班で最後でした。後で分かったことですが、弥栄村の避難民はここで第一陣と第二陣に分けられ、山形屯や後から緩化に着いた西弥栄の人たちは二日ほど遅れて出発したのに、新京でストップして降ろされ、そこで冬を越したそうです。私たちが乗った汽車は屋根のあ

る貨車でしたが、大連に着くまでの間には、とてもお話しできないような悲しい情けないことが数多くありました。汽車が鉄橋を渡り始めると、死んだ子供を下の河を目がけて水葬にする光景を数多く見ました。駅に汽車が止まるたび銃を持ったソ連兵、暴徒の満人が扉を開けさせて押し入り、現金や貴重品などを強奪する様子は、戦国時代の昔はこんなだったのかと思わせる状況でした。

九月二十四日大連に着きました。緩化から十日もかかりようやくたどり着いた大連は、今まで過ごした緩化に比べれば街中はまだ緑があり、戦火にさらされていないすばらしい町並みに見えました。この町中を着のみのままの難民がぞろぞろと歩いて、収容所に充てられた大連実業学校に着きました。教室の一室に落ち着き、板敷きの床でしたが、家を出て一カ月半ぶりに人間の住む所にきたという感じがしました。羽陽屯の十家族ほどが同室となり、大連での生活が始まりました。ここで、配られた米のご飯、おにぎりなどをいただくながら、涙が流れました。家を出てから初めて

の有り難さ、嬉しさであり、このときの感激は味わった人にしかわからないでしょう。子供たちも満腹感で、安らかな顔で眠るのでした。収容所本部のお話では、大連に住む日本人の方々や、○○県人会、○○婦人会などの人たちが、奥地から避難してきた日本人の姿があまりにも悲惨なので、援助の手を差し伸べてくださったことを知りました。食糧の他に衣類、毛布、布団なども配給されて本当に助かりました。私たちのため援助してくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいでした。

一週間ほどはこの救援食糧のおかげで人心地のついた生活でしたが、本部から、各人は仕事を探して働くようにとのお話があり、最初に働きに出たのが便所のおくみ取り作業でした。今までは満人がこの仕事をしていましたが、戦争に勝ったからと言ってやめたので、日本人が困って依頼があったのです。しばらく働きましたが、家を出てから二カ月近い避難生活の心労と、栄養不良も重なって、私の母乳が出なくなり仕事を休むことになりました。まだ生後一年足らずの女の子

が、だんだん元気がなくなり病院に入院しましたが、十分な薬もなくなかなか良くなりませんでした。あるとき子供に向かって独り言で「お前はもう生きていてもどうしようも無いんだから、どうせなら早く死んでくれた方がいいよ」と口から出ました。隣のベッドのお母さんが「あなた！ 自分の子供でしよう。かりそめにもそんなことを言うものでない」と諭されてハッと我にかえりました。しかし、その晩子供は息を引き取りました。死んだという悲しさは強くありました。が、気の毒にと思いつつもホッとした気持ちのあったことも事実でした。悪い母親だと異国の地で私を恨んでいるかもしれませんが、私の真意は許してもらえろと思っっています。大連に着いて一カ月半たった昭和二十年十一月十日のことでした。実業学校の裏山へ、男の人たちにお願ひして、形だけの埋葬をしてもらいました。

次の仕事は清掃作業でした。同室の留場さんの奥さんと二人で働きました。この仕事も今までは満人の仕事でしたが、やはりやらなくなり、大連市内でゴミが

滞って困ったので、たくさんの避難民がこの仕事に携わり命をつないだのです。

清掃といえばきれいに聞こえますが、仕事は「ゴミ処理」作業です。近くの駅に勤めていた日本人のお世話で大八車を借り、大変に重宝しましたので、借料を支払いに行ったところ、「あなた方が、子供を抱え苦労しながら頑張っているのを見ていただけで十分です」と申されお金を受け取られませんでした。この荷車のおかげで随分助かったのに、こんな温かい言葉をかけてくださった人に心から感謝しました。この仕事をしていくうちに、足を傷めて休むようになり、他の人に大八車を渡しました。

五十余年たった今も足や膝の痛みに苦労しているのは、このときに傷めたことが尾を引いているものだと思います。こんなことから、なるべく動かなくてもできる仕事を考えましたが、うまい仕事はなかなかありませんでした。たまたま満人に頼まれて帽子を編んでやったところ、非常に喜ばれ評判が良く、次々と注文があり、編み物の仕事をすることになりました。そん

なときに次男が、鏡ヶ池で水遊びして帰るなり高熱を出しました。医者診断では脳膜炎とのことで、治っても元には戻らないかもしれませんと言われました。

水枕を探して日本人の家を訪ね歩きましたが、どこにも無く困っていましたら、ある家で「うらなりの南瓜をすりおろして、麦粉をまぜ、練って後頭部に湿布すれば良くなる」と言われ早速に試したところ、効果があったのか間もなく熱が下がり、快方に向かい元気を取り戻しました。気分が良くなれば子供のこと、「リングゴを食べたい」とせがむのですが、お金が無くて買えません。「無いよ」と言ったら、いきなり走り出して本部の売店へ行き、「ここにあるよ」と言います。

私の「無いよ」はお金のことなのに、売店にはあるかということだったので。「編み物のお金がすぐ入るか、それまで貸してください」と頼み、支払いを待ってもらいました。またしても人の情けの有り難さに頭の下がる思いでした。

その後、リングゴ売りもしました。これは山手のリング園から仕入れて街頭で売り、差額が利益ですが、こ

の仕事は季節的なこともあり長くは続きませんでした。その後働いたのは石鹼売りでした。満人が経営している石鹼工場から仕入れて売り歩くのですが、仕入れの価格を安くしてもらい助かりました。最初の仕入れに行ったときは、金は一銭も無かったのですが、事情を話して頼みましたところ「子供を抱えて大変でしょう。よろしい、お貸ししましょう」と、どこのだれかもよくわからないのに信用してくれたことを、本当に有り難く思いました。国籍は違っても人間の気持ちはつながり合えるものだ、このときは心の底からそう思いました。

このようにして弥栄村羽陽屯を出てから一年四カ月の避難民生活を送り、昭和二十一年十二月三日大連港乗船、十二月八日佐世保上陸、十二月十六日山形県の主人の実家に帰り着きました。

主人は、昭和二十年七月召集を受け、満州と朝鮮の国境にある安東の部隊に入隊し、すぐに朝鮮の南に移りここで終戦を迎えました。満州に残した家族を心配して何とか帰ろうとしましたが、当時、北朝鮮を通行

することは危険で不可能とのことから、やむなく日本に帰り、家族を待つことになったのです。部隊はすでに解散になり、九月中旬に日本に上陸、すぐに山形県の実家に帰ったそうです。そのころはまだ、海外の日本人の安否の情報はほとんど無く、昭和二十一年八月に満州からの引揚げが開始されて、初めて情報が手に入るようになったそうです。私たちのことを心配しながら、主人は実家の家業を手伝いながら待っていてくれたのです。そして昭和二十一年十二月十六日、満州弥栄村で別れてから一年半ぶりで主人と再会できました。

四 再びの開拓・北海道へ

主人は昭和二十年九月復員、私は昭和二十二年十二月引揚げ。しばらくは、主人の実家で手伝いをしながらお世話になっておりました。しかし敗戦後の日本は食糧事情が悪く、農村でも大変窮屈な思いをしておりました。育ち盛りの子供三人を抱えた家族の生活を、主人は実家に申し訳ないと思っていたようです。昭和二十二年正月を過ぎて間もなく、山形県庁開拓課か

ら、「弥栄村の人たちが、北海道の釧路と青森県の野辺地との二カ所に入植する計画があるが、どちらかに入植しないか」という通知がありました。青森の方は工藤村長さんの引率で、山形から江口さんが参加するらしく、北海道は元満拓の中村さんが引率するという話でした。主人は随分考えておりましたが、羽陽屯で一緒だった高橋さんと共に、北海道で二度目の開拓に挑戦することに決心しました。

昭和二十二年四月、北海道釧路原野の一角にその名も「弥栄部落」として、山形県十五戸、新潟県六戸、岩手県六戸、長野県一戸の計二十八戸が先遣隊として入植し、主人もその中の一人として出発しました。私は一足遅れで、十月現地に参りました。最初は一棟二戸の共同小屋に入居、栗野さんと同じ棟でした。満州の開拓とはまた違った苦勞を致しました。育ち盛りの男の子三人を抱え、食糧の無いのに一番悩まされました。そんなことも今では夢のようですが、主人は昭和四十八年十月、六十五歳でこの世を去りました。二度目の開拓もまだ完成したとは言えないときで、志半ば

で残念だったと思います。弥栄部落の開拓入植五十周年記念式が行われましたが、喜びの反面入植当初の人たちが残り少なく、淋しい思いもしました。

現在、我が家の酪農経営は満州弥栄村生まれの長男が後を継ぎ、所有面積約五十町歩、飼育乳牛約百頭、出荷乳量年間四百五十トンを孫たちと共に盛り立てております。

五 おわりに

終戦前、弥栄村で死亡し羽陽屯の高台に遺してきた二人の子供。引揚げ混乱の中で亡くして大連の山に埋葬した娘。遠い異国の大地に寂しく眠る子供のこと。は、忘れようにも忘れることはできません。他のお母さんたちも皆同じ思いのはずです。私の人生は、色々多くのことを体験しましたが、避難・引揚げという出来事は大変なことだったのです。

「ばあちゃん、もう一度満州へ行ってみたらどう」と子供に言われますが、体力的に行ける訳も無く、また、今更行ってみたいとも思いません。苦しかったことが思い出されるだけですから……。

日本人や満人の心ある人に親切にしていたこととは、涙の出るほど嬉しかったです。苦しいこともありました。人の情けに心から感謝しております。この感謝の気持ち、引揚げの苦勞よりも有り難いと思っております。

戦争だけでは絶対にしないでください。二度とあやまちを繰り返さないでください。昔の苦い体験を忘れないでください。

孫に伝える私の戦争体験

青森県 中 岫 正 雄

一 広大な満州が呼んでいる

私は、昭和五（一九三〇）年十一月生まれなので、あの敗戦の年は数えの十六歳だった。今の数え方で言うと満十四歳と九カ月ということになる。私の生まれ、昭和の初期は、歴史に残るように米国の株価大暴落から端を発した世界経済恐慌の嵐の中にあった。

ここ青森でも昭和六年、七年、さらに十年と冷水害に見舞われて、農民生活は悲惨のどん底にあり、それに対する政府の救済政策は極めて低調であったので、農民の日常生活は救いようのないほどに困窮して、農業への希望を失っていた。

昭和十一年に、当時の広田内閣が打ち出した七大政策の中に、「満州農業移民計画」があった。そのスローガンの一つに、「広大な満州が呼んでいる」というのがあったが、その魅力に、困窮している農民が飛びついたのも無理からぬことだった。

満蒙開拓移民団員の募集には、一定の年齢制限があり、その上限は三十九歳であったので、父はその年齢制限上限のぎりぎりの歳に移民団に入った。もしかしたらこの年齢制限が父の満州行きを決断の重要な要因だったかもしれない。

実のところ父は分家して、水田を有する小作農で、分家して九年がたった。その父に、何が満州行きを決意させたのか、直接的には前記の事情があったからだろうが、そのほかに考えられることは、当時の日